

金属を通して歴史を観る

5. 金属比価の歴史(1) 基礎資料の収集

新井 宏

日本金属工業(株) 常務取締役

価格は雄弁に技術を語る

技術、特に技術水準を語る時、その製品の価格を語ることほど雄弁なことはないと信じている。技術は、科学とは異なり、経済性の上でのみ成り立っていることを、職業生活を通じていやというほど味わって来たからである。

金属価推移表への無謀な試み

そのため、ぜひとも歴史的・地域的に、各種金属の価格の推移を調べて表にしてみたかった。しかし金属の生産量推移さえまともな資料として利用しうるものがない現在、このような無謀な試みをした方は、極めて限定されている。筆者の知る限り、唯一このような着想で古代日本の鉄、銅ならびに錫、鉛、金、銀についての比価をまとめられたのが村上英之助氏である。氏は川崎製鉄の副社長を勤めた経理出身の方であるが、アマチュア研究者として、鉄等の古代史分野でユニークな業績を残しておられる。そもそもこのようなことを思い付き、ためらいなく実行に移るのが、アマチュア研究者の特徴なのである。

いいかえれば、いかに資料を発掘するかとか、いかに資料を批判するとかいうオーソドックスなアプローチに加え、空白の部分、強烈な独断力とか偏見力で補っていかないと、とてもまとまらない仕事なのである。物価というものの宿命であるが、各時期・各地域で、通貨は異なり、度量衡は異なり、品質規格も異なっている。その中でいかにして、意味のある比較を可能とするか、そこに私の出番がある。

とにかく、まず表4を見て頂きたい。この表は全て各種金属や主食穀物の価格を「比価」で示している。当然のことながら、各金属価をローカルな通貨単位で示しても意味をなさない。それでは何を基準にすべきか、おそらく最も望ましいのが、労賃との比較である。しかし、これがきわめてむずかしい。職種はもとより、その置かれた社会環境によって、賃金には極度の差があり、どうしても基準にはなり得ない。次善の策は、主食の価格との比較である。これならかなりグローバルな共通のスケールとなり得る。ただし欠点もある。飢饉などの時に価格が暴騰しがちで、しかもその際の価格が記録に残りやすいことである。史料の批判なくしては、かえって価格推定の精度を落としかねない。

結局のところ、最後の手段は、金銀等の貴金属価格との比価を採ることである。幸い、金銀ともに、世界各地で本位通貨として使用された実績をもっており、時代や地域を超えて比較しうる強みがある。しかしながら、この方法のみでは、各種金属間の採鉱冶金技術の進展に、共通性、類似性があると、各金属の特徴がキャンセルされてしまう恐れが高い。多少困難でも、主食穀物との比価をめざして進み、金銀比価の資料で補っていくことにする。

金属価格表の基礎資料収集

かくして、表4を作るための基礎資料の収集を始めた。その資料収集結果を表5にまとめておく。もちろん表5は表4を作るための基礎資料であるから、

表4 各種金属の比価推移 (付米穀比価)

		金／穀	銀／穀	銅／穀	鉄／穀	金／銀	銀／銅	銅／鉄	金／銅	金／鉄
	メソポタミア (BC2500頃)					8	25		200	
	古代エジプト (BC2000頃)					6	240		1,500	
	ペルシャ (BC500頃)					12	120		1,500	
	ローマ (BC200頃)					10	110		1,100	
	(BC70頃)	30,000	2,500			12				
中国	前漢	6,000	2,000	20	5	3	100	4	300	1,200
	唐	12,000	2,000	12	5	6	160	4	1,000	2,400
	北宋 (1070頃)	20,000	2,500	16	3	8	160	5	1,300	6,000
	明 (1400頃)	20,000	4,000			7-8				
日本	奈良	8,000	2,500	28	6	3	100	4	300	1,250
	平安 (延喜式)	9,000	2,900	25	7	4-5	80	3	400	1,300
	平安 (1152頃)	10,000	2,000	80	6	5	25	12	120	1,600
	鎌倉 (1298頃)	12,000	4,000	50		3	75		220	
	室町 (1450頃)	20,000	3,700	9		5-6	400		2,200	
	戦国 (1580頃)	12,500	1,250	6		10	200		2,000	
	江戸 (1680頃)	12,000	1,000	6	2.5	12	160	2-3	1,900	5,000
	江戸 (1770頃)	17,000	1,400	9	2.2	12	160	4	2,000	8,000
	江戸 (1830頃)	20,000	2,000	14	1.8	10	140	7	1,600	11,000
	明治 (1890頃)	14,500	850	6	1.35	17	140	4.5	2,400	11,000
	大正 (1925頃)	5,200	200	3	0.37	26	70	8	1,800	14,000
	昭和 (1960頃)	4,000	70	0.7	0.12	57	100	6	5,600	30,000
欧州	英国 (14世紀)	24,000	2,000	9	4.8	12	220	2	2,700	5,000
	英国 (1519頃)	45,000	3,800	9		12	400		4,900	
	欧州 (1542頃)					12	170		2,000	
	英国 (1600頃)	17,000	1,100	7.9	1.9	15	140	4.5	2,200	9,000
	英国 (1782頃)	10,500	710	6.8	1.3	15	100	6	1,550	8,000
	英国 (1830頃)	8,600	550	5.9	1.1	16	90	8	1,440	8,000
	英国 (1847頃)	7,900	506	6.1	0.63	16	83	10	1,300	13,000
現在の世界の状況		20,000	350	3.5	0.6	57	100	6	5,600	30,000

わずらわしいと思われる方は飛ばして先に進んでほしい。しかし、労多くして功少ない私の作業につきあってください方は、ぜひともこれからの議論に加わって頂きたい。

表5の資料は、中国、日本、ヨーロッパと3つに大別して示している。データの精粗は当然ながらマチマチである。しかし、精度向上にはできるかぎりの努力は払ったつもりである。表中に記載した数値の出典、あるいは算出根拠は、表中に①②③④の形でリファレンスを付け、以下の本文で注釈を加える。冒頭にことわったように、本稿は論文構成ではないので、参照資料については必ずしも原典を示す必要はない。しかし、後日の議論のためには、たとえ孫引きであっても、ぜひとも原典についても紹介しておきたい。多少煩雑な記述になるがご容赦願いたい。じつを言えば、本人は学術論文を書いている気分なのである。

中国関係の基礎資料

①主として宮崎市定氏の「史記貨殖伝物価考証」『ア

ジア史論』の考証による。漢代の物価を記すほとんど唯一の史料である『史記』貨殖伝に、百万銭と等価な財貨として、穀物千鍾 (鍾は10斛すなわち1000升で、容積200dm³、重量150kg)、漆器千枚、銅器千鈞 (鈞は30斤、7.5kg)、鉄器千石 (石は120斤、30kg)、馬二百匹、牛五百匹、丹沙千斤 (250kg)、絹布・真綿・細麻布千鈞、棗栗三千石とある。これにもとづいて計算した。

②前漢時代、金1斤につき、銭1万文というのは極く標準的な換算関係であった。この例を踏まえて、『漢書』食貨志に出てくる王莽の幣制改革でも「黄金重一斤直銭萬。朱提銀八兩為一流直一千五百八十、它銀一流直千、是為銀貨二品」としている。銀には二種類あるが、純銀と思われる高価な方を採用する。なお『孫子算経』に「錦一疋価一万八千、黄金一斤価十万」とある。孫子算経は隋書や唐書に見える。内容的には漢代の度量衡を用いているところが見られ、書の性格上 (算数例題集) 隋代以降の価格が示されている可能性が高い。隋代以降は漢代の三斤が一

表5 各種金属比価の基礎資料

	米穀類	金	銀	銅(熟銅)	鉄(半製品)
前漢	100 錢/斛(15kg) ① 7 錢/kg	1 万錢/斤(250gr) ② 40 錢/gr	1580 錢/8 兩(125gr) ② 13 錢/gr	1000 錢/鈞(7.5kg) ① 133 錢/kg	1000 錢/石(30kg) ① 33 錢/kg
唐 (830 頃)	80 錢/斗(5kg) ③ 16 錢/kg	8 千錢/兩(40gr) ④ 5785 錢/兩(40gr) ⑤ 145~200 錢/gr		750 錢/貫(4kg) ⑥ 190 錢/kg	7 世紀初, 鉄/米比価=5 ⑦
北宋 (1070 頃)	50 錢/斗(5kg) ⑧ 10 錢/kg	800 錢/錢(4.0gr) ⑧ 200 錢/gr	1000 錢/兩(40gr) ⑧ 25 錢/gr	100 錢/斤(0.64kg) ⑧ 156 錢/kg	20 錢/斤(0.64kg) ⑧ 30 錢/kg
奈良時代 (760 頃)	540 錢/石(60kg) ① 9 錢/kg	900 錢/兩(12.5gr) ② 72 錢/gr	900 錢/兩(37.5gr) ③ 24 錢/gr	149 錢/斤(0.60kg) ④ 248 錢/kg	58 錢/kg ⑤
平安時代(延喜式)	22 束/石(60kg) ⑥ 8 錢/kg	6 丁/兩(12.5gr) ⑥ 72 錢/gr	1 丁/分(10gr) ⑥ 15 錢/gr	5 束/斤(0.60kg) ⑥ 188 錢/kg	1.5 束/斤(0.60kg) ⑥ 56 錢/kg
平安末期(1152 頃)	10 疋/石(60kg) ⑦ 16 錢/kg	20 疋/兩(12.5gr) ⑦ 160 錢/gr	12 疋/兩(37.5gr) ⑦ 32 錢/gr	8 疋/斤(0.60kg) ⑦ 1300 錢/kg	2 疋/挺(2.0kg) ⑦ 100 錢/kg
鎌倉時代(1298 頃)	105 疋/石(60kg) ⑧ 17 錢/kg	300 疋/兩(15gr) ⑧ 200 錢/gr	100 疋/兩(15gr) ⑧ 67 錢/gr	56 疋/斤(0.60kg) ⑧ 900 錢/kg	
室町時代(1450 頃)	1300 錢/石(130kg) ⑨ 10 錢/kg	3000 錢/兩(15gr) ⑨ 200 錢/gr	550 錢/兩(15gr) ⑨ 37 錢/gr	1 万錢/駄(113kg) ⑩ 90 錢/kg	
戦国時代(1580 頃)	1000 錢/石(130kg) ⑨ 8 錢/kg	1500 錢/兩(15gr) ⑨ 100 錢/gr	150 錢/兩(15gr) ⑨ 10 錢/gr		
江戸時代(1680 頃)	3500 錢/石(150kg) ⑪ 23 錢/kg	4000 錢/兩(15gr) ⑪ 267 錢/gr	4 千錢/60 匁(180gr) ⑪ 22 錢/gr	150 匁/100 斤(60kg) ⑫ 140 錢/kg	35 匁/10 貫(37.5kg) ⑬ 58 錢/kg
江戸時代(1770 頃)	5300 錢/石(150kg) ⑪ 35 錢/kg	5000 錢/兩(8.6gr) ⑪ 600 錢/gr	5 千錢/60 匁(100gr) ⑪ 50 錢/gr	223 匁/100 斤(60kg) ⑭ 310 錢/kg	40 匁/10 貫(37.5kg) ⑮ 78 錢/kg
江戸時代(1830 頃)	6000 錢/石(150kg) ⑪ 40 錢/kg	6000 錢/兩(7.4gr) ⑪ 800 錢/kg	6 千錢/60 匁(74gr) ⑪ 80 錢/gr	320 匁/100 斤(60kg) ⑯ 567 錢/kg	62 匁/24 貫(90kg) ⑯ 73 錢/kg
明治時代(1890 頃)	4.7 錢/kg	68 錢/gr	4 錢/gr	28 錢/kg	6.3 錢/kg
大正時代(1925 頃)	27 錢/kg	140 錢/gr	5.4 錢/gr	80 錢/kg	10 錢/kg
昭和 (1960 頃)	76 円/kg	570 円/gr	11 円/gr	288 円/kg	36 円/kg
平成 (1998 頃)	330 円/kg	1300 円/gr	23 円/gr	230 円/kg	40 円/kg
英国 (14 世紀)	28.6 Sh/ton ①		57 Sh/kg ②		138 Sh/ton ①
英国 (1519 頃)	30.3 Sh/ton ③		114 Sh/kg ③	280 Sh/ton ④	
欧州 (1542 頃)		286 Du/kg ⑤	25 Du/kg ⑤	148 Du/ton ⑤	
英国 (1600 頃)	149 Sh/ton ⑥	2570 Sh/kg ⑥	166 Sh/kg ⑥	1180 Sh/ton ⑦	260 Sh/ton ⑦
英国 (1782 頃)	244 Sh/ton ⑧	2570 Sh/kg ⑧	174 Sh/kg ⑧	1663 Sh/ton ⑧	320 Sh/ton ⑧
英国 (1830 頃)	291 Sh/ton ⑨	2500 Sh/kg ⑨	161 Sh/kg ⑨	1732 Sh/ton ⑨	320 Sh/ton ⑨
英国 (1847 頃)	318 Sh/ton ⑨	2500 Sh/kg ⑨	161 Sh/kg ⑨	1930 Sh/ton ⑨	200 Sh/ton ⑨
現代世界	65 円/kg	1300 円/gr	23 円/gr	230 円/kg	40 円/kg

(大)斤であり、その単位系で読み替えた方が良くと思われる。本稿では採らない。

③根本誠氏の「唐代の主要物資の価格について」『史観』65によれば、貞観の初め頃(627年頃)絹一疋米一斗(新唐書食貨志)、開元12年(724)穀斗五文(産地価格)米斗20文以下(兩京)絹一疋210文(通典七)、貞観3年(629)豊稔時、米斗3~4錢(貞観政要その他)、開元13年(725)東都米15錢(通鑑)、兩税のとられた建中元年(780)米価200文で安定、建中初め(780)粟斗100文(李文公集九ほか)、開成五年(840)粟米斗30~50文、粳米斗70~90文であった。このように唐代は物価変動がいちじるしく、時期を特定しないと比較の意味がない。一方、唐代の金銀の価格に関する史料は極く少なく、開成年代頃に二例あるのみである。そのため、比較のためには開成の頃の物価を採り、粳米斗70~90文から、米1斗80錢を採用している。

④加藤繁氏の『唐宋時代における金銀の研究』によ

れば、宋代の書『因話録』卷三に一兩錢八千文とある。開成年代の記事と考えられている。

⑤円仁の『大唐求法巡礼行記』東洋文庫に「開成三年(838)砂金大二兩を市頭に於いて交易せしむ。市頭の秤定は一大兩七錢にして、七錢は大二分半に准当し、価は九貫四百文なり」とある。東洋文庫の注記では、九貫四百文を大一兩の価としているが疑問である。これは一兩二分半の代金とすべきであろう。その場合は大一兩当たり5,785文になる。

⑥以下は主として宮沢知之氏の『宋代中国の国家と経済』による。『冊府元龜』の天寶十一年(752)に「毎貫錢用を約するに、銅鑄錫の価七百五十文」とある。鑄錢用の原料費であり、銅鉛錫の平均価格であるが、安価な鉛と高価な錫を含むことから、平均的には銅の価格に近いと理解できる。錢一貫の実重は開元通寶なら計算上4キロ。ただしこの史料は開成年間とは年差があり、天寶末年から諸物価の暴騰があったので、直接の比較には注意が必要。開成年間により

近い史料としては、貞元10年(794)に、銅禁を解くと同時に、銅器価格の最高値を強制的に毎斤160文に引き下げた例がある。この場合の銅器価格は1000文/貫である。地金の銅価としては、750文/貫としても良いであろう。ちなみに、貞元19年と開成3年(838)の絹価はほぼ等価である。

⑦唐代の鉄価を示す史料はほとんどない。ただ大嶺敦弘氏の「中国古代における鉄製農具の生産と流通」『東洋史研究』49に、7世紀初頭の高昌国で、鑠鉄1文/斤、調鉄4文/1斤5兩との史料を紹介している。鑠鉄は鋏用で鑄鉄と思われ、調鉄は鍊鉄であろう。一方、7世紀初頭の米価は貞観3年(629)に豊作で3~4文/斗である。平年作の場合を5文/斗(5kg)として、米鉄比価を求めると、鑠鉄で1.5、調鉄で4.8である。

⑧以下も同じく宮沢知之氏の前出著書による。穀物、金銀価については、宮沢氏の要約「宋代の価格と市場」の市価の長期的変動を参考に要約した。また、銅価については、『宋会要』食貨三四の二五、坑冶雜錄、崇寧元年(1102)に、膽銅が毎斤44文、あるいは50文、また煎銅(膽銅の一種)が80文とあることと、『宋会要』食貨三四の二五、坑冶雜錄、乾道元年(1165)に、膽銅毎斤130文、黄銅220文とあり、通常の鋳銅が膽銅の1.7倍であることを参考に、平均価として斤100文とした。鉄価については、慶曆八年(1048)に、毎斤24~25文とあり、また熙寧七年(1074)に20文の例がある。

日本関係の基礎資料

①角山幸洋「八世紀中葉の畿内における物価変動」『千里山論集』2による。天平勝宝三年(751)~天平宝字六年(762)の黒米の価格は1石500~600文であった。

②天平勝宝四年(753)の「黄金貢輸令」によれば、多賀城以北の諸郡は調庸の代りに黄金を正丁4人当たり一兩貢輸することになった。調の分だけで計算すると六丁で一兩になる。丁の単価を仮に150文とすると、900文/兩。また、天平宝字四年に発行された開基勝宝(金貨)は、その重量が11~15グラムであり、基準重量が一兩(12.5gr)であったと考えられるが、これが和同開珎1000枚に相当していた。これを基にすれば、1000錢/兩になる。一方『大日本古文書』16の天平宝字6年の「安都雄足啓案」に、

減金小兩別准直150文とあるが、減金は金1に対して水銀5の割合の合金で、水銀が小兩8文であることから、金の価は860文/兩と計算される。総合して考えると900文/兩が妥当な価と考えられる。なお、村上英之助氏は、「八世紀における日本の鉄価と各種金属比価(再考)」『たたら研究』30のなかで、減金を金として取り扱っているが、種々の記録に照らし、減金はすべて上述のアマルガム液の意に用いられているので、誤りと考える。

③竹内理三氏の『寧樂遺文』東京堂、1962、p.781に収録された、天平宝字二年(758)の『観世音寺奴婢帳』によれば、「充直稻壹千二百束准銀三十兩」など、全て銀一兩を40束に対応させている。20束から一石の米が取れ、一石の米の価を550文とすれば、稲20束は450文程度である。したがって銀一兩900文になる。

④『大日本古文書十六』東京大学出版、1982、p.317に収録された、『安都雄足啓案』正倉院文書に「熟銅六兩太准直五十六文」とある。ここから149文/斤が得られる。その他に、福山敏男氏の「奈良時代における興福寺西金堂の造営」『日本建築史の研究』によれば、天平六年(734)の生銅の価格が斤別36文と54文の二種がある。この場合の斤を村上英之助氏は小斤と考察している。大斤に換算すると108~162文/斤である。氏の論考「八世紀における日本の鉄価と各種金属比価(再考)」『たたら研究』30による。

⑤同上の村上英之助氏の考察結果(32文/斤)を参考にした。ただし養老令では、賦役令の場合鋏3口と鉄1挺が等価、禄令の場合鋏5口と鉄2挺が等価と、ふたつの基準がある。鋏の市価を45文として鉄は33.75~40.5文になる。35文/斤を採用する。

⑥『延喜式』では、主計上の調の項と禄物価法の項で、相対物価について触れている。まず主計上では、諸国の調を丁当たり、銀の場合一分、鉄の場合二挺(挺は三斤五兩)としている。このことから、銀、鉄の相対価格が判るが、便宜のため、一丁150文で換算する。次に禄物価法では、各物資の価格を直稻の束で表示しているが、畿内の場合、鉄は一挺(三斤五兩)五束である。また備中、長門、豊前等が貢納する銅鉛は、斤別三束九把六分五毛七厘である。銅と鉛を込みにしての価であるが、銅のみを採れば斤別

五束と見ることができる。金については触れていないが、おそらく黄金貢輸令の場合と同様と考えられる。稲 20 束を仮に 450 銭として換算する。

⑦小葉田淳氏の『金銀貿易史』からの孫引きであるが、仁平 2 年(1152)におこなわれた鳥羽法皇の 50 歳の宝算に際して、国司調進物および可進納行事所見色物の価値を記して、銀両別 12 疋、熟銅斤別 8 疋、鉄 4 廷で 1 疋、能米 1 石別 10 疋とある。建久 4 年(1193)の宣旨で 1000 文 1 石としており、実際の米の売買価格も同程度であるので、疋を 100 文として計算した。また、鉄については、重量単位の廷が良く分らない。『延喜式』に出てくる挺であれば、とても考えられないほど安価になってしまう。ここで思いあたるのは、村上英之助氏の論考「鉄挺の遠近」『考古学研究』40-4 である。氏は、鉄 1 挺は小斤で 10 斤であるが、もともとは小 1 斤すなわち 222 グラム程度の鉄挺 10 枚の集合を 1 枚の大形鉄挺で代表させたと考察している。事実、古墳から出土する鉄挺は大部分が、この小斤の値に近い。また中国の唐代遺跡の何家村から出土した銀板 60 枚の形状が鉄挺そっくりであり、重量が 5 両(209 グラム)であることもその推論の根拠になる。しかし、単なる誤記の可能性も否定できないので、ここでは同時期の別史料、すなわち久寿 2 年(1155)の石山寺丈六仏支度に「1 挺 2 疋」とあるのにしたがう。なお当時の金銀比価は、応徳 2 年(1089)に 5 倍であった。

⑧上と同じく小葉田淳氏の『金銀貿易史の研究』からの孫引きであるが、永仁 6 年(1298)の『御即位用途記』に、銀両別 100 疋、銅斤別 56 疋、米石別 107 疋、砂金両別 300 疋とある。鎌倉時代の疋は 10 文を意味している。銀と金の単位である両が、小両(12.5 グラム)か京目(金 4 匁 5 分、銀 4 匁 3 分)かが問題であるが、京目(純分で 15 グラム)としておく。

⑨宮本又郎氏などの『歴史の中の物価』に紹介された各種史料から、おおよその傾向をまとめた。この頃、米の単位の石は、かなり現在の重量に近づいているが、よく分っていないので、暫定的に 130 キロとしておいた。

⑩興福寺門跡大乘院尋尊の『大乘寺社雑事記』の文明 12 年(1480)の条に、「備前、備中で一駄十貫文の銅を仕入れ云々」とある。一駄は 30~36 貫。

⑪日本銀行金融研究局『貨幣年表』1981 に収録された米相場、金・銀・銭相場の他に、岩波全書『地方史研究必携』などを参照し、金貨、銀貨の量目や純分は、対象時期に主に流通していたと思われる通貨の価によった。

⑫『長崎市史』通交貿易編によれば、明暦年間(1655~58)の国内の銅相場が銀 114 匁/100 斤。また小葉田淳氏の『日本銅鋳業史』では、延宝元年(1673)足尾丁銅 10 万貫を金 1 万両で払下げを受けて、棹銅に吹き長崎に運ぶと 3000 両の赤字であったと言う。すなわち 1.3 両/10 貫(125 匁/100 斤)が原価であった。その他、田代和生氏の『近世日朝通交貿易史』によれば、貞享元年(1684)から宝永 7 年(1710)の朝鮮への輸出価格平均が吹銅で 210 匁/100 斤であったが、対馬藩の仕入れ価は 114 匁であった。本稿では市場価格を想定しているので、次項の買上げ価格と売下げ価格の差を考慮して 150 匁/100 斤とした。

⑬『加計町史』による。元禄 13 年(1700)の価格は銀 28.4 匁/10 貫、元禄 14 年(1701)の価格は 33.6 匁/10 貫であった。ただし、元禄 14 年は物価高騰の年なので、元禄 13 年の史料を採用する。ただ、これは卸値であるから、消費地の価格は、35 匁/10 貫程度になる。

⑭小葉田淳氏の『日本銅鋳業史の研究』に、生野銅の明和 3 年(1766)の吹銅価格を銅 100 斤につき買上げ価格を 148 匁、売下げ価格を 223 匁としている。

⑮岡田廣吉氏編『たたらから近代製鉄へ』平凡社の表による。大阪表積み入れ値段。

⑯宮本又次氏の『近世大阪の物価と利子』創文社による。天保元年(1830)の丁銅の価格で、320 匁/100 斤。また鉄の価格は 62 匁/2 束(24 キロ)

ヨーロッパ関係の基礎資料

①村上英之助氏の論考「八世紀における日本の鉄価と各種金属比価(再考)」『たたら研究』30 を参考にした。氏はこの中で、L.F.Salzman, *Mediaeval English Industry*, H, p.26 にもとづき、エドワード II 世の治世(1312~1377)の鉄の値段をハンドレットウェイト(50.8kg)当たり 7 シリングと紹介している。また 14 世紀前半の小麦価格については、L.Beveridge, "The Yield and Price of Corn in the Middle Age", E.M.Carus-Wilson, *Essays in Economic History*, p.20

で、8 ブッシェル当たり6.3 シリングと紹介している。8 ブッシェルは1 クォーターであり、290dm²すなわち220kg 程度である。

②アダム・スミス、大河内一男氏監訳『国富論』中央公論社の第十一章「過去四世紀間における銀の価値の変動に関する余論」には、1350年とそれ以前のしばらくの間、英国の小麦の平均価格は、タワー衡で銀4 オンス以上であったとある。タワーポンドは350gr なので、銀4 オンスは116.6gr になり、18世紀の20 シリングになる。その後、小麦価は銀2 オンスまで低下し、16世紀初頭まで続いたようである。またタワー衡の銀四オンスは、当時の貨幣の6 シリング8 ペンスに相当していた。これらの関係から、銀はキロ当たり57 シリング。

③同上「過去四世紀間における銀の価値の変動に関する余論」によれば、1512年の小麦価は1 クォーター当たり6 シリング8 ペンスから5 シリング8 ペンスであった。もっとも5 シリング8 ペンスは6 シリング8 ペンスの誤記の可能性が大。この頃の6 シリング8 ペンスはタワー衡で銀2 オンスに相当。これは銀キロ当たり114 シリング。なお1558年頃には、この6 シリング8 ペンスの銀は18世紀の6 シリング10 ペンス(銀41.1gr)。これは銀キロ当たり162 シリング。

④諸田実氏の『フッガー家の時代』による。1519年、アントウェルペンではハンザ商人の銅は1 キンタル(100kg) 当たり26 シリングであったが、フッガーは28 シリングで販売した。また、1516年のベネツィアの取引引きでは、銅を7,368 ツェントナー(360ton) を31,747 ドゥカードで、銀を15,850 マルク(3,883kg) を122,898 ドゥカードで販売している。この頃の1 ドゥカードは約3 シリングに相当。

⑤ 同上諸田実氏によると、フッガー家は銅について、1541年6,000 ツェントナーを41,000 ドゥカードで、1542年、293 ツェントナーを761 ドゥカード、100 ツェントナーを750 ドゥカードで販売した。それぞれ、6.83、2.60、7.50 ドゥカード/ツェントナーであるが、2.60の例は何かの誤りと思われ、除外して考えた。また、銀については、1552年1 マルク(0.245gr) 当たりの価格が、純度により異なり、メキシコ産は2,280 マラベディ(6.1 ドゥカード)、ペルー産2,030 マラベディ(5.4 ドゥカード)であった。また金につ

いては19 カラットのものが1 ペソ(5gr) 425 マラベディ(1.133 ドゥカード) すなわち純金では1 ペソ当たり535 マラベディ(1.43 ドゥカード)であった。

⑥前出『国富論』の「過去四世紀間における銀の価値の変動に関する余論」には1595~1620年の中程度の小麦1 クォーター当たり32 シリング8 ペンス9 分の8 すなわち銀6 オンス3 分の1(197gr) と計算している。

⑦村上英之助の前出論考による。銅の価格は1602年、M.B.Donald, Elizabethan Copper, 1955, London から採った。また鉄の価格は1591年の棒鋼価格12 ポンド/ton にロッド加工費として、1 ポンド/ton を加えたもの。

⑧トーマス・トウック、藤塚知義氏訳『物価論』による。1782年の小麦1 クォーター当たりのウィンチェスターの平均価格は53 シリング9 ペンス4 分の1、イギリス産銅の価格はハンドレッドウェイト(50.8kg) 当たり84.5 シリング、英国産銑鉄は6.75 ポンド/ton、ロシア産鉄は16 ポンド/ton である。なお、金は4 ポンド/オンス、銀は5 シリング5 ペンス/オンスで計算。

⑨同上『物価論』により、1830年頃の小麦1 クォーター当たりの価格は64 シリング、イギリス産銅はハンドレッドウェイト当たり88 シリング、英国産銑鉄は5 ポンド/ton、ロシア産鉄は16 ポンド/ton。また同じく、1847年の場合は小麦70 シリング、英国銅98 シリング、英国産棒鉄10 ポンド、スウェーデン鉄12 ポンド、金3 ポンド17 シリング9 ペンス、銀5 シリングであった。

次号で本論を

以上、長々と退屈な史料探索に付き合っていたいて恐縮している。しかし、実を言えば、筆者が本稿で最も力を入れた項目のひとつであり、内容によっては単独の論文で論ずべき項目も多く含んでいると自負するところもあり、ご容赦願いたい。これらの資料を参考にして、新たな資料発掘に向う方が生まれることを期待している。

次回は、金属比価に関する本論に入る。